

2024 年度 一般入試

第 1 回

国語

[注意事項]

- 1 問題は一から四までです。
- 2 時間は 50 分です。
- 3 下敷きおよび電算機つきの時計の使用を禁止します。
- 4 解答は、濃くはっきりと書くようにしてください。
- 5 開始の合図があるまで問題用紙を開かず、手を触れないでください。
- 6 試験中はよそ見をせず、きちんとした態度で行ってください。
- 7 何か物を落としたら、黙って手をあげてください。
- 8 他の受験生に迷惑となるような行為をしないでください。

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

夢をあきらめた少年（かなた）は、夏休みに訪れた奄美大島の浜辺で少女の幽霊（ゆうれい）に出会う。少女は記憶（きおく）を失っているため、あの世へ行くことも、浜辺から出ることもできないという。彼方は少女の記憶を取り戻すため、話し相手になると約束をした。

屋に油あぶらずうめんを食べて、デザートにスイカを食べてから、ぼくはいつものように少女のいる浜辺へとでかけていった。あつというまの数日で、ぼくの収集箱にはたくさんの貝がらが集まった。

奄美あまみの海には、千種類以上の貝がいる。黒潮の流れで、南の特徴を持った貝がたくさん見られるのだ。

「これ、ルリガイだ！」

ぼくはうす紫色の巻貝を手のにせて、少女に見せた。

貝がら集めをはじめから、ぼくも部屋の本棚（ほんだな）にあった貝の図鑑を読んで、ずいぶんくわしくなったのだ。

その図鑑のなかで、ルリガイはぼくがいちばん見たかった貝だ。

ルリガイはうすくて繊細（せんさい）な貝だけど、ぼくが見つけたものは、ほとんど欠けていなかった。

「はじめて見た……きれいだね」

少女がぼくの手をのぞきこんで、にっこりと笑った。

顔が思いのほか近くて、どきりとする。

「浮遊貝うきう貝って言って、海面をプカプカういて、旅する貝なんだってさ」

ぼくが I を泳がせて説明すると、

「いいなあ……」

と、少女はうらやましそうに、ぼつりとつぶやいた。

ぼくは手のひらのルリ貝と、目のまえに広がるルリ色の海を見て、

「……ルリは？」

と、提案してみた。

「ルリ……？」

「うん、あんたの名前。あんた、って呼び続けるのもわるいし」

ぼくは気はずかしくて、ぶっきらぼうに言った。^②

「ルリ……。わたしの名前は、ルリ。……すてきな名前だね。ありがとう！」

「どういたしまして」

ぼくはすまして答えたけど、少女——ルリが自然に笑うと、ちょっとうれしくなる。

「たくさん集まったし、貝がら集めはもういいかな」

ルリ貝を収納ケースにいれながら、ぼくがなにげなくそう言うのと、

「……そっか」

一瞬の間^③があって、ルリがさびしそうに言った。

「ほら、今日はサンダルを持ってきたから、海にはいってみようかと思って。水着は持ってきてないし、ひとりではいるなって言われてるから、泳ぎはしないけどね」

ぼくがあわててそう言うのと、ルリがちいさく笑ったから、ほっとした。

ぼくはさっそくサンダルにはきかえて、透明な海水に足をつけてみた。暴力的な陽ざしではたっていた体が、

A 楽になる。

「ねえ、冷たい？」

ひざしたまで海につかったルリが、そんなことをたずねてきた。

ルリが歩いても、波は動かない。どれだけ風が吹いても、ルリの髪はゆれないし、風を感じることもないらしい。

海の水が冷たいのかも、潮のにおいがあるのかも。

夏のこの暑さも、ルリにはわからない。

「ひんやりして気持ちいいけど、すぐになじむし、冷たいってほどじゃない。湿気は強いけど、風は涼しい。潮のにおいは……鼻がなれたせいか、よくわかんないな」
ルリにすこしでも伝わればいいと思って、ぼくはせいっぱい考えて、言葉を選ぶ。

腕^{うで}についたしずくをぺろとなめて、「しょっぱい」と舌をだしたら、ルリは吹きだすように笑ってくれた。

さざ波の音。

やわらかな風。

いくつもの表情を持つ、空と海の青——。

ふだんは眠っているような五感をフル回転させて、この空間を、記憶にきざみつけようとしている自分がある。

ぼくは、この時間がずっと続けばいいのにと思いはじめていた。

だけど、「楽しい」と思うと、つぎの瞬間には終わりのことを考えてしまう。

「こっちに魚がいるよ！」

——不安にたこの気持ちをなんて言えばいいのか、ぼくにはわからない。
気をとり直してぼくが声をあげると、ルリがぱっとかけよってきた。

たったふたりだけの島に暮らしているような、ずっとこんなふうに過ごしてきたのだというような、しあわせな錯覚。
この島にいられるのもあと一週間だけど、ルリがこの浜辺にずっといるなら、来年もまた会えるかもしれない。

④ そう思った瞬間、ぼくはぞっとした。

自分がどれだけ残酷なことを考えたか、おくれて気づいたのだ。

「どうしたの？」

ぼくが一瞬、顔をこわばらせただけで、ルリが声をかけてくる。

「……この浜辺をでよう」

ぼくは意を決して、声をしぼりだした。

「でも、わたしはここからでられない……」

ルリはほとんど条件反射のように、かすれた声で言う。

「そんなの、あきらめずに続けてみなきゃ、わかんないだろ！」

ぼくは思わず、かみつくように声をあららげていた。

ルリの気弱な顔を見るのが、くやしかったのだ。

「どこかにぬけ穴があるかもしれないじゃんか。思いつくこと、ぜんぶやってみようよ」

自分の口からでた言葉に痛みを感じたけど、ぼくはルリをまっすぐに見すえてから、アダンの林へと歩いていった。^{*}

浜辺の入り口に立って、ルリにむかって手をさしだす。

ぼくが根気強く待っていたら、ルリは緊張した面持ちで、ぼくの手に自分の手をかさねてきた。

ふれた感覚はないけど、水のなかでゆっくりとたぐりよせるように、そのままうしろむきに歩いて、ルリを誘導する。

浜をでる瞬間、ルリの体がひきもどされるみたいにかすかにゆれたけど、ルリは B こらえて、ぼくを追いかけて手をのばした。
そして、ルリの足が、砂浜とアスファルトの境界を越えた。

「……でられた」

ルリが、ぼうぜんとつぶやく。

「できたじゃん！」

ぼくが声をあげて笑うと、ルリは泣き笑いの表情をうかべて、何度もうなずいた。

「自転車のうしろに乗りなよ。町をぐるっとまわろう。幽霊とだったら、ふたり乗りにならないよね」

「ふたり乗り、だめなの？」

「ふつうはだめだよ、あぶないから。……あ、でも、そもそも乗れるのかな」

「やってみる」

ルリはじっと自転車を見つめてから、重大な実験をするような顔つきで、そっと荷台に腰をかけた。

「……うん、イメージしたら、できるみたい」

「なんだったけ、人間が想像できることは、必ず実現できる……って、だれかが言ってたっけ」

ぼくは自転車にまたがって、ふと思いついて言った。

「ほんとうだね、たしかにそうかも」

背中から、ルリのはずんだ声がする。

「……ほんとうに、そうなのかな」

ぼくはペダルをこぎながら、ぼろっと本音をこぼしていた。

「もっとはっきり夢を想像できていたら、ぼくの夢もかなったかな……」

「彼方くんの夢？」

「うん。サッカー選手になりたかったんだ。でも、才能がなくて、試験に合格できなかった」

「それで、あきらめちゃった？」

「ぼくは……体が弱かったから、サッカーなんてむりだって、ずっとまわりに言われてた。それでも、やれるだけはやっただよ」
顔を見られていないと思うと、なさけない言葉がつぎつぎとでてしまう。

（また、うざいって思われるかな）

ぼくは半分あきらめた気持ちで、そう思った。

ルリはもう、夢を追いかけることもできない。ほんとうにどうにもできないひとからすれば、自分がどう見えるかくらい、わかっていた。だから、

「ほんとうにサッカーが好きなんだね」

ぼくは一瞬、ルリの言葉が理解できなかった。

「……なんで？」

「わかるよ。あきらめたくないって気持ち、声と言葉にじんでるから。わたしは、夢中になれるってことが、いちばんの才能だと思うけどなあ」
ルリの言葉がすとんと胸に落ちてきて、ぼくはとっさに言葉をかせせなかった。

「むりって、いやな言葉だよ」

自分もだれかに言われたのか、ルリは心底いやそうな声で言った。

「正しいこともふくまれているから、否定するのがむずかしいもの。でもね、それがひとの努力をじゃまするための言葉なら、それを言ったひとは、好きなことをいっしょうけんめいやっているひとは、ぜったいに勝てないんだよ」

ほんとうは勝ち負けじゃないけど、とルリはおどけてつけ加えたけど、その言葉を聞いたとき、^⑤ぼくは救われたような気になった。

「夢が想像できたらさ、つぎは、その夢をどこまで信じられるか……じゃないかな」

ルリのおだやかな声は、潮騒とかなって、耳に心地いい。

「夢は、そのひとだけの世界だから。つらくても苦しくても、かけがえない世界だよ」

「……うん」

ルリは、いつになくじょう舌^{*}だった。ぼくをばげまそうとしてくれているんだろうけど、もしかしたら、生前の性格をとりもどしつつあったのかもしれない。

「だいじょうぶだよ。ほんとうに好きなことなら、あきらめようと思っても、あきらめきれないから」

^⑥ルリのいたずらっぽい声に、どれだけ救われたかわからない。

ルリがだまると、遠ざかる波の音だけが、ぼくらのあいだを満たしていた。

それはとても、居心地のいい沈黙^{ちんもく}だった。

遠藤由実子『夜光貝のひかり』より

* 油ぞうめん……奄美大島の郷土料理。

* アダン……南国に生える木。

* 潮騒……潮が満ちるときに波がたてる音。

* じょう舌……よくしゃべる様子。

問一 I に適する語を漢字一字で答えなさい。

問二 部①「少女はうらやましそうに、ぽつりとつぶやいた」とありますが、それはなぜだと考えられますか。最も適するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分も以前からルリガイをほしいと思っていたのに、彼方が先に見つけてしまったから。
イ 自分は浜辺から出られないが、本当はルリガイのようにあちこちを旅したいと思っているから。
ウ 彼方はこれから多くのことを学べるが、自分はもう何かを学ぶことはできないと思っているから。
エ 彼方はルリガイを見つけて喜んでいて、自分としてはもっとおすすめの貝があったから。

問三 部②「ぶっきらぼうに」の意味として最も適するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア あかくなって イ はやくちで ウ ぶあいそうに エ しずかに

問四 部③「ルリがさびしそうに言った」とありますが、ルリはなぜさびしそうなのでしょう。説明しなさい。

問五 A・B に適する語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア ぐっと イ すくと ウ どきりと エ すっと

問六 部④「そう思った瞬間、ぼくはぞっとした」とありますが、なぜぞっとしたのですか。その理由を説明した次の文の X・Y に当てはまる言葉を答えなさい。

自分は無意識のうちに X と思ったが、それは同時にルリが Y を意味することに気づいたため。

問七 部⑤「ぼくは救われたような気になった」・⑥「ルリのいたずらっぽい声に、どれだけ救われたかわからない」とありますが、「ぼく」を救ってくれたルリの言動として不適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 弱音をはく自分を否定せず、夢をあきらめたくないという本心に気づいてくれたこと。
イ 才能のあるなしではなく、夢中になれるかどうかが一番大事なことでと教えてくれたこと。
ウ 誰かの努力をじまますための「むり」という言葉は、言った本人を必ず不幸にするとさとしてくれたこと。
エ 自分だけのかけがえのない夢をどこまで信じ、努力し続けられるかが大切だと背中を押してくれたこと。

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

オランダの低地では、つねに高潮や洪水に悩まされてきました。西暦九〇〇年から一九〇〇年の間に一二〇回を超える水害の記録が残っています。とくに近年は気候変動によって短時間にたくさん雨が降り、何度も洪水が発生しています。一九九五年の洪水では、二五万人もの人たちが一週間以上、避難生活を余儀なくされました。①古くから、オランダでは海の水を堰で食い止めたり、川の堤防を高くしたりして水災害への対策をとってきましたが、この方法では、今後ますます大きな水災害の危機に対応できないという思いが、人々に広がってきています。

そんななか二〇〇八年、オランダで全国的に新しいプロジェクトがスタートしました。それは「ルーム・フォー・ザ・リバー」といい、洪水のときに水があふれる場所をあらかじめつくるというものです。水を押さえ込むのではなく、水をあふれさせるまちづくりです。

堤防を高くすることに代表されるこれまでの治水は、高い壁で水と人間の世界を分けるものでした。一方の「ルーム・フォー・ザ・リバー」は、遊水地をついたり、川幅を広げたりと「水のための空間」をつくります。「ルーム・フォー・ザ・リバー」の目的は、治水だけではありません。人が心地よく暮らすための空間をつくるねらいもあります。これまで他の地域の例で見てきたように、本来水辺は人々に恵みをもたらすのですから。

たとえば、オランダ国内を東から西へと流れるワール川の周辺に住む人々は、大規模な土木工事計画を「よりよい暮らしをつくる機会」としてとらえ、熱心に話し合いました。じつは、計画通りに進めば工事によって引越さなくてはならない人も多く、最初は反対の声が多かったのです。理想的な未来を共有し、何度も話し合いを行ったすえに合意することができました。

(中略)

未来を見据えて考え、行動するという姿勢を学びたいと思いました。

オランダでは、別の解決方法をもつ人にも会いました。ロッテルダム郊外のレイスウェイクというまちに暮らす建築家のコーエン・オルトウイスさんは、「水に浮く家」を考えています。「いつでも家のすべての部屋から水の景色を楽しむことができる。水面が上昇すれば、それに合わせて家も上昇するから、洪水や高潮も関係ない」

なぜ巨大な家が水に浮かぶのでしょうか。ほとんどの木は水に浮きます。この性質を利用して丸木船や筏を水に浮かべ、人間は水の上を自由に移動できるようになりました。その後、船はめざましい発展をとげました。筏はボートになり、やがて大型帆船が世界の海を駆けめぐる大航海時代を経て、船の素材は鉄に変わり、近年では巨大タンカーも現れました。

船が水に浮くということは、船の重さが水に支えられているということです。

水に浮かんだ木片を沈めようとしたとき、小さい木片は比較的簡単に沈められますが、大きい木片は浮力が大きいので、なかなか沈めることができません。同じ材質であれば、浮力は物体の体積に比例するのです。

B

より体積が大きく、より軽くすることができれば、巨大な家でも水に浮くというわけです。

A

人々は時間をかけて、

オルトウイスさんの計画は、家だけに止まりません。最終的には、河川、運河、湖、内海などに「浮くまち」をつくろうとしています。

「浮くまちは、世界が抱える二つの問題を解決すると考えている。一つは土地の不足、もう一つは気候変動への適応だ」
現在、世界の人口は沿岸の都市に集中し、土地不足、住宅不足が起きています。

ア しかし埋め立ては、海岸線の自然を破壊することでもあります。

イ また、そもそも沿岸都市は気候変動による海面上昇の影響を受けやすいのです。

ウ 埋め立て工事で砂が流出し、水質が悪化します。

エ 過去数十年間、アジア各地の沿岸都市は、埋め立てにより土地を増やしてきました。

東京や大阪にもゼロメートル地帯が広がっていて、豪雨のときにどう避難するかが問題になっています。

水の上にまちをつくるという発想は、この二つの問題を解決する可能性があります。まちに浮くものは、さまざまです。ロッテルダムでは、四〇メートルの木製オフィスタワーを水に浮かべようという計画を立てています。多くの生きものががするタワーも考えられています。オルトウイスさんが考えたのが水に浮遊する「海の木」です。ケーブルで水底につなぎとめられ、水上部分は陸上生物や鳥の生息地、水中部分は水生生物の生息地となります。

(中略)

ぼくがここで浮く建築を紹介した理由は二つあります。一つは、困ったときに、これまでと違った発想をすることの大切さです。課題の設定は柔軟なほうがいいのです。豪雨災害が増えてきたときに、ダムや堤防をどうするか、遊水地や田んぼもつかって治水するにはどうしたらいいか、あるいはどうしたらみんながスムーズに避難できるかなどの課題があります。多くの人が設定された課題の答えを探します。ですが別の課題を自分で設定してもいいのです。その例が「どうしたら浮くことができるか」なのです。

もう一つは、気候変動の対策さえも、ビジネスになってしまおうということの怖さです。気候変動を利用してお金をもうけられる、経済成長ができると考える人はいるでしょう。困っている人にそれを解決する方法を売ればもうかります。そういう人にとっては、人々はなるべく気候変動に対して何もしないほうがいい、気候変動は止まらないほうがいいのです。

「水に浮かぶまち」は、もしかしたら、選ばれたお金持ちだけが乗船できるノアの方舟になってしまいかもしれません。そういう危険があることも知ってほしいと思います。SDGsでは、「誰一人取り残さない」を原則にしているからです。

橋本淳司『水辺のワンダー』より

* 堰……水流をせきとめ、または調節するしきり。

* ノアの箱舟……昔、神が人類の墮落をいかって大水を起こしたとき、ノアという正しい人は、世界中が水の下になる前に、神に命じられたとおり、四角の船を造って乗りこみ、家族や動物たちとともに助かった、その船。

- 問一 ―部①「余儀なく」の意味として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。
- ア 差別なく公平に イ 自由がなく強制的に ウ それ以外にしかたなく エ 話し合う時間がなく
- 問二 ―部②「ルーム・フォー・ザ・リバー」の目的にあたるものを次の中からふたつ選び、記号で答えなさい。
- ア 人が快適に生活する空間をつくるため。 イ 水上家屋を建てる空間をつくるため。 ウ 水が流れ出す空間をつくるため。
- エ 生活用水をたくわえる空間をつくるため。 オ 耕作用の雨水をためる空間をつくるため。
- 問三

A

・

B

 に適する語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。
- ア つまり イ そこで ウ さて エ あるいは
- 問四 ―部③「水に浮く家」にはどのような問題点があると筆者は考えていますか。わかりやすく説明しなさい。
- 問五 本文中

--

 内の文を正しい順番に並べかえなさい。
- 問六 本文では、オランダにおける水災害への対応に変化が見られることが述べられています。水に対する基本的な考え方とその考え方に基づく具体的対策は、古い時代と今を比べるとどのように変わりましたか。その変化をまとめた左の図の「a」・「c」に当てはまる言葉を、文中の語句を用いて答えなさい。

	古い時代	今
水に対する基本的な考え方	・「 という考え方。」 a	・「 という考え方。」 b ・水に浮かべるとい考え方。
具体的対策	・海の水を堰で食い止めること。 ・川の堤防を高くすること。	・水のための空間をつくる計画。 c 「」をつくる計画。

三 次の四字熟語が下に示された意味になるよう、 に適する漢字二字をそれぞれ答えなさい。

- | | | | |
|---|----------------------|----------------------|-------------------------------|
| 1 | <input type="text"/> | 一会 | 【一生に一度会うこと。】 |
| 2 | <input type="text"/> | 自足 | 【自分に必要なものを自分で作り、まかなうこと。】 |
| 3 | 異口 | <input type="text"/> | 【多くの人が口をそろえて同じことを言うこと。】 |
| 4 | 独立 | <input type="text"/> | 【人にたよらず自分の信じるとおりに実行すること。】 |
| 5 | 温故 | <input type="text"/> | 【昔のことを研究して、そこから新しいものを見つけること。】 |

四 次の――部のカタカナを漢字に直しなさい。

- 1 ゾウキ林を散歩する。
- 2 ごみがサンランしている。
- 3 きわめてゼンリョウな人。
- 4 木版に文字をキザむ。
- 5 草木を用いて布をソめる。

